そらんぽへ行こう　Vol.90

「大昔の四日市」展開催中です

そらんぽ四日市
ホームページ

市立博物館恒例の「大昔の四日市」展を、５月６日まで当館３階常設展・時空街道内「白里亭」で開催しています。でも、四日市の大昔っていつ頃のことでしょう。

四日市の歴史をさかのぼると、化石が本市で発見された「アケボノゾウ」が歩いていた太古の世界が広がります。しかし、考古資料から分かる四日市の大昔の人の営みは、縄文時代から弥生時代を経て古墳時代に至る間と考えれば良いのではないでしょうか。

中でも、羽津地区にある志氏神社には、古代の豪族である額田連の祖・意富伊我都命の墓と目される、市内唯一の前方後円墳があります。

本展では、特に本市を舞台に繰り広げられた弥生時代から古墳時代に至るまでの人々の生活を、市内各地の埴輪や５世紀頃に渡来人によって伝えられた須恵器、銅鐸、銅鏡などの出土品を通じてご紹介しています。

また、ミュージアムショップでは、弥生・古墳時代の人々の暮らしに関連したさまざまなグッズも販売しています。

三重県指定文化財「銅鐸」
（弥生時代中期）
菟上耳利神社蔵
（市立博物館寄託資料）

問 博物館・プラネタリウム（TEL 355-2700　FAX 355-2704）

文化財さんぽ　Vol.25

江戸時代の東海道を偲ぶ「道標」

江戸時代の四日市は、東海道五十三次の43番目の宿場町「四日市宿」として栄えました。当時（天保年間1830～1844年）の記録によると、現在の中部地区には、旅籠が98軒あり、東海道でも有数の宿場であったとされています。東海道に沿って、三滝橋から宿の中心である「札の辻」までを北町、以南を南町、辻から西を西町、東を立町とし、辻には高札場、本陣、問屋場などの宿の主な施設が集まっていました。

現在、江戸時代を偲ぶものが徐々に少なくなる中、国道１号を諏訪神社と挟んだ北東（南町）に道標が立っています。

高さ2.2mの道標には「すぐ江戸道」「文化七庚午冬十二月建」「（右）京いせ道　（左）ゑどみち」「すぐ京いせ道」と刻まれています。この道標は、戦後に地元の人たちにより複製されたものですが、元の道標はこの道標より北にあった「札の辻」に立っていました。

この道標から、往時の東海道のにぎわいに思いをはせてみませんか。

東海道の道標

問 文化課（TEL 354-8238　FAX 354-4873）